

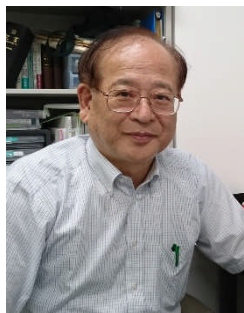


パリアン 16年の歴史(2)

ひと CUM DEO LABORAMUS

医療法人社団パリアン理事長

川越 厚



1973年東京大学医学部卒業。茨城県立中央病院産婦人科医長、白十字診療所在宅ホスピス部長などを経て、1994年より賛育会病院長を務め、緩和ケア病棟を立上げる。2000年6月、クリニック開業と同時に、在宅ケア支援グループ“パリアン”を設立。

創設期から支えてくれたひと

医療機関を運営する上で、トップに立つ者にとって最も頭を悩ませるのが人事。賛育会病院長時代、身を以ってそのことを体験した。必要数の医療者を確保することは、病院長に課せられた責務である。賛育会病院と違って、パリアンは規模が小さく新しい組織だったので、僕は自分の理念を掲げ、それに共感して共に働いてくれる医療者を求めればよかった。

CUM DEO LABORAMUS というラテン語は、「私たちは神と共に働く」という意味。新約聖書に記された(コリントの信徒への手紙第3章9節)パウロの有名な言葉である。

パリアンは言うまでもなく、信仰共同体ではない。また、職員の中でキリスト者が占める割合も非常に少ない。その意味では、ごく普通の医療機関と言ってよい。だからパリアンを支えてきた人々を語るとき、このような聖書の言葉を引用するのが適切かどうか、迷うところだ。しかしパリアンには明確な創立理念と、平凡な人間ではあるが、創始来のチームリーダーが存在する。そのリーダーを支え、共に17年を歩んできたのが、パリアンに連なるひとである。

パリアンの歴史は創立当初から今に至るまで、私の妻の博美(現看護部長)と二人のスタッフが、綻びの多い私を支えてきた。看護部長に関しては省略するが、事務長は私が在宅ケアの研鑽を始めた白十字診療所時代からのスタッフで、20数年私の仕事を

支えてくれている。もう一人の研究担当者は教育、研究、厚生労働省関係の仕事などで、大きな力を発揮してきた。この三人の変わらぬ助けが無ければ、いまのパリアンはなかったはずである。

ひとの採用で重視したこと

医師や看護師の募集に際しては、私たちの活動、理念をしっかりと理解し、ここで学ぶという姿勢をきちんと持っているかどうかを最重視した。ここで育った医師が、それぞれの地域で在宅ホスピスケアを実践している。国立長寿医療研究センターの緩和ケア診療部長を辞してパリアンに来た中島一光医師は、当院での2年間の常勤医を経て、現在、地元の愛知県で活躍している。また現在研修中の田伏弘行医師は、4月から地元の和歌山県で同じような診療を開始する予定である。

ホスピスケアは看護介入(Mor)*1であり、志を高くかけ、優秀で心ある看護師の存在はホスピスに必須である。パリアンはその点非常に恵まれており、創立当初から素晴らしい人材に恵まれてきた。

患者さんからよく、「先生の所はどうして、よい



訪問看護パリアンの看護師

看護師さんが集まるのですか」と質問を受けるのだが、私たちが重視しているのは、パリアンの理念を理解しているかどうか、ひとの苦しみを自分の苦しみとして受け止めることができるかどうか、臨床的な能力があるかどうか、チームのみんなと仲良くできるかどうか、精神的に安定しているかどうかということだ。それから、自動車を運転できるということも必須条件だ。

理念を共有するひとと共に働く

このような条件を満たすひととなるとどうしても数は少なくなるが、それでも看護師の確保で困り果てたことはない。現在「訪問看護パリアン」には、看護部長の他に7人の常勤看護師が在籍し、専門看護師、認定看護師の資格を持っている看護師もいる。

30歳代の働き盛りの看護師が多く、最近では4年以上勤続する看護職員も増えてきた。4月には2名の看護師が新たに就職することになっている。

CUM DEO LABORAMUS。パリアンをこれまで支えてくれた人たちのことを思うとき、このラテン語が私の心に強く響いてくる。パリアンの場合、「理念を共有する者と共に働く」と言い換えることができよう。

*1 Hospice is primarily a nursing intervention, A philosophy of patient care designed to keep the patient as comfortable and functional as possible until death.(Mor V. :Hospice Care Systems, 1987)

<次号に続く>

ラジオ NIKKEI 『大人のラヂオ』誌上配信

川越厚医師が出演しているラジオ番組の2016年12月23日放送分を抜粋してお届けします。ゲストは、医学生時代にパリアンで実習された伊藤明子(みつこ)さんです。伊藤さんは現在、東京大学病院小児科医師ですが、多くの国賓や芸能人の同時通訳者としても有名です。

川越「伊藤先生に初めてお会いしたのは10年ほど前でしたね。まだ帝京大学の学生のころにパリアンに実習で来られて、終わったときに自作の素晴らしい詩を送っていただきました。詩の画像のバックには確か「ローズ」の歌が流れていましたね。

伊藤「あの曲は、アメリカ映画『ROSE』(1979年)のエンディングテーマです。酒と薬のために急死したロック歌手のジャンス・ジョプリンの生涯を描いた作品で、主演のベット・ミドラーが歌ったものです。歌詞には、愛情の表裏が込められていて、愛情は人を傷つけることもある、でも愛は将来に向けて希望のある暖かなものだ、というメッセージになっています」

川越「愛を死に置き換えると、その二面性には似ているところがあるなと思って聞いていました。デリケートなところはあっても、人を豊かにしてくれるものだというような…。この曲は欧米の葬儀などでも歌われるのですか？」

伊藤「アメリカでもイギリスでも、お葬式やお別れの会で使われています。アメリカのお別れ会に出たことがあります、そこでは死そのものは悲しい出



パリアン実習当時の伊藤明子先生と川越医師

来事ではあるけれども、それはそれとして、その人の人生そのものが素晴らしいものだった、そこをみんなでセレブレイト(祝う)しましょうという感じですね」

川越「私も、在宅で患者さんを看取ったときは、ご遺族にネガティブなことは言いません。在宅の場合、家族は本当にこれでよかったのか、と迷っておられるので、よかったのですよと、ポジティブなことを言うようにしています」

伊藤「服装も黒ではなく、ピンクや白のワンピースだったりします。父を2年前に在宅で看取りました

が、イギリスで生まれ育った妹は、黒の喪服に違和感を持ったといっていました」

川越「海外のホスピスを見に行き思うのは、死は文化の差が表れますね。さまざまな宗教の人がいるのですが、それをとても大事にしながらケアしていることが印象にのこりました。

では、自作の詩もご披露いただけますか」

伊藤「はい。

家で死ぬこと、家で看とること

病院にいてもがんの末期で治らない

できれば住み慣れた家で死にたい

でも家にいる自分を診てくれる医者があるだろうか

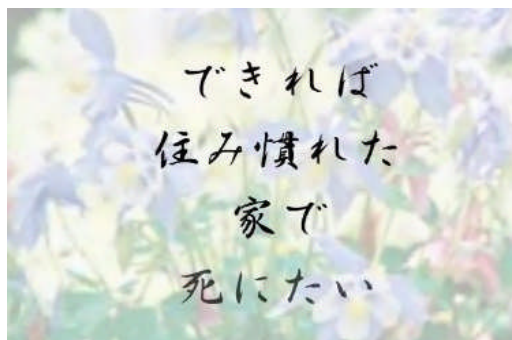
家族の負担が重くなるのではないだろうか

家で最期を迎えたい患者と

看取る家族を全面的に支える

経済的にも入院するより負担が軽い

体の痛みはお薬で、心の痛みは傾聴と共感で



伊藤先生から贈られた自作の詩のアニメ画面

「自分の人生って何だったのだろうか」

「自分が家族の輪からいなくなるのは寂しくてたまらない」

自分の存在についての^{スピリチュアル・ベイン}霊的な痛みも

^{デス・エデュケーション}死にゆく過程のお話をして取り除く

死は近づくときの息遣いの変化など

予測される全身の変化について

予め伝えながら不安をぬぐう

不必要な検査は一切しない

「管理」をしない「生活、暮らし」を重視する

1日1日を穏やかに

良い時間を家で共に過ごすこと

死が近づくことを受け止めながら過ごすことで

得られる和解と許し

孫やペットがそばにいる時間

「今、息を引き取りました」

体も 心も 魂も 死への旅立ちを整えられる

医師、看護師、スタッフが皆で支えているから

自分の家で死ぬ幸せを」

川越「短い期間でしたが、よく学んで、よくまとめてくださいましたね」

この番組の全体は、ラジオ NIKKEI「大人のラヂオ」で聞くことができます。詳しくは次ページ「パリアンスタッフの講演等予定」を参照してください。

パリアンでの実習を終えて

2016年10月24日～31日に、帝京大学大学院公衆衛生学研究科の学生さん3名が、パリアンで在宅ホスピスケアの実習を受けました。実習にあたり、学生の同行訪問を受け入れてくださった患者さんご家族に感謝申し上げます。学生さんが実習の感想を寄せてくださったのでご紹介します。

死の教育は命を考えることから始まる

帝京大学大学院 公衆衛生学研究科1年 鈴木雅子(看護師・助産師・養護教諭専修)

私は教員養成の大学で働きながら医学生をしています。来年度から導入予定の小中学生への「がんに関する教育」に携わる事から、今回の実習に参加しました。

私はがん教育には死の教育が必要だろうと短絡的に考えていました。ところが川越厚先生より「命の教育をせずしてがん教育を語るなかれ」という言葉を聞き衝撃を受けました。死の教育ではなく命の教育が必要とは考えてもみなかったからです。

しかし、実習時に訪問した方が命のあり方を自ら決められている姿や、ご家族が残された命をありのままに受け入れている様子を拝見し、死を迎える時間の中で精一杯「今の命」を考える事こそが死の教育に繋がる事を実感しました。産婦人科医を経験された川越先生だからこそこの言葉は、私の人生にとっても大きな学びとなりました。担当する生徒にぜひ伝えていきたいと思います。素晴らしい学びをありがとうございました。

在宅ホスピスケアの理解を広める情報発信

帝京大学大学院 公衆衛生学研究科 専門職学位課程1年 小川留奈(医療ライター)

訪問診療で知った、患者さんとご家族それぞれの胸の内。病状だけでなく心の変化まできめ細やかに情報共有するカンファレンス。川越厚先生の在宅ホスピス医としての哲学。これらを通じ、在宅ホスピスケアの理想形は、患者さんの数だけあると実感しました。ならばマスメディアは、どのような情報を発信すべきか。そのヒントは、実習時に拝見した『愛する人たちへ...最期は家で...』(1993年テレビ朝日放送)にありました。丁寧に取材したドキュメント映

像には、死がまだ身近でない視聴者にも、自分や家族の“理想の最期”を考えさせる力がある。そういう意味でも同番組の社会的意義は大きいと感じます。もちろん私の専門である活字媒体でも、読者が我が事としてイメージできるような現場の声を積極的に伝えていく必要があるでしょう。最後に、快く迎えてくださった患者さんとご家族、プロの仕事を見せてくださったパリアンのスタッフの皆様にご心より感謝を申し上げます。

在宅で最期を享受できる社会にしたい

帝京大学大学院 公衆衛生学研究科 専門職学位課程2年 櫻井純子(保健師)

訪問に同行させていただき、自分が自分について決定できる権利がたくさんある在宅の暮らしを、もっと多くの人々が享受できる社会にしたい、とさらに強く決意しました。好きな時間に起きて、好きな物を食べて、好きなペットと暮らし、好きな人に見守られて、いつもの家のおいしさを聞きながら、自分が「主」である場所で最期まで暮らすことを望めば叶えられる最期なら、自分も穏やかな気持ちで年を重ねていかれる、と感じました。

今後は自分の専門性(保健師)を生かした活動のほかに、在宅で最期を迎えることを望む人が全国に増えること。そして、病院や施設にいる職員たちが多様な生活をしている人の姿をみる機会を作ること。さらには子どものころから死が生の延長であることを日常的に感じられるようにすることを視野にいれて活動したいと思います。今後の活動の拠り所となる体験ができました。みなさまありがとうございます。

パリアンスタッフの講演等予定

講演者	開催日	会	演題	会場
川越厚	2月4日	第6回パリアン公開講演会	「愛する人たちへ...最期は家で...」	鉄門記念講堂(文京区)
川越厚	2月14日	杉並・中野・新宿3区合同産婦人科医会学術講演会	「在宅での看取り、ホスピス医として心がけていること」	杉並区医師会館(杉並区)

フェイスブック(<https://www.facebook.com/hospice.pallium>)でも講演予定を随時紹介しています。

川越厚医師出演番組

ラジオNIKKEIのホームページで、川越厚医師が出演した番組をオンデマンドで聴くことができます。

大人のラヂオ(ラジオNIKKEI第1 金曜日11:35~12:30) <http://www.radionikkei.jp/otona/>

12月23日放送分 東京大学付属病院小児科医師の伊藤明子先生へのインタビュー

1月13日放送分 公開収録 出演:立川らく朝、米澤敦子(東京肝臓友の会事務局長)、篠崎菜穂子(アナウンサー)、川越厚

1月27日放送分 「がん哲学学校」ゲストスピーカー 川越厚

2月17日・2月24日 出演予定

日曜患者学校(ラジオNIKKEI第1 毎月第1・2・3日曜日21:00~21:30)

<http://www.radionikkei.jp/inochi/>



2月の玄関飾り

(芝田葉子さん制作)

パリアンスタッフ紹介

「ちょっとおせっかい」の気持ちで患者さんを支援していきたい

「訪問介護事業所パリアン」サービス担当責任者・ヘルパー 関口美奈子

パリアンに入って3年になります。介護保険制度のもと医師、看護師、ケアマネジャーと連携しながら、患者さんのお宅をローテーションで訪問しています。

パリアンのヘルパーは、ご自宅を訪問して患者さんの日常生活を支援することはもちろんですが、それだけではなく、看護師さんに同行して助手的なお手伝いをすることもあります。これはパリアン独自のサービスだと思います。

訪問は自転車で行くことが多いですね。渋滞に巻き込まれることもないので、時間が正確ですから。

患者さんは末期の方がほとんどなので、死を意識されていることが多く、つらい状況にあると思うのですが、そんな中でもご挨拶を返していただいたりすると、ほんとにうれしいですし、やりがいを感じます。

もちろん、お世話をさせていただいた方が亡くなった時は気持ちが落ち込みますね。そんな時は、以前パリアンで訪問医をされていた中島一光先生とのお話を思い出して、気持ちの整理をしています。

あるとき先生が「死んだらどうなると思う?」とおっしゃったので、自分が経験したことを思い浮かべて、「亡くなるときはお迎えが来るように思いますが」と申し上げたら、「サケは自分が生まれた川を忘れずに戻るといふ信じられないようなことをやるでしょう。人間も亡くなったら知っている人たちがいるところに帰っていけるのじゃないかな」と言われたのです。

それからは、自分も命が尽きたらきっとそうなるから、お世話をした人にまた会える、さよならじゃないのだと思うようになりました。

「ちょっとおせっかい」の気持ちで、これからもお世話していこうと思っています。



訪問に出かける関口さん

ボランティア活動予定(2月~3月)

・手作りボランティア(毎月第1月曜日 13時~)

2月6日・3月6日

・サロン・ド・パリアン(毎週金曜日 10時15分~)

2月3日・10日・17日・24日、

3月3日・10日・17日・24日



サロン・ド・パリアン

・訪問ボランティアミーティング

3月10日 14:00~16:00

・命日カードボランティア(偶数月第3木曜日 10時30分~)

2月16日

・事務ボランティア(毎月第3土曜日 13時~)

2月18日

ボランティア活動日は変更されることがあります。

そのときは各リーダーから連絡いたします。